

転生錬金術師が契約夫を探したら、  
王子様が釣れました

**カーティス・ウェストン**  
ウェストン公爵。外交部の若  
きホープ。

**ロウロウ**

アイラの同僚。性別以外はす  
べて不明。

**アイラ・ジェーンズ・  
リンステッド**

ジェーンズ子爵令嬢。錬金  
省の有能な宮廷錬金術師。  
仕事中毒で、自由に研究をす  
るためにノアとの契約結婚を  
決める。実は転生者であり、  
前世の記憶が錬金術の研究  
にも役立っている。

**ジュディ・ミリガン**

アイラの友人で同僚。玉の輿  
を狙っていて恋愛ゴシップに  
詳しい。

Characters



エルザ・ラウシェンバッハ  
・リンステッド

リンステッド王国王太子の妃でア  
イラの義姉。

ユージン・レイノルズ

レイノルズ公爵。宮廷錬金術  
師師長でノアの幼馴染。

ノア・ファビウス・  
リンステッド

リンステッド王国第二王子に  
してアイラの契約結婚相手。  
文武ともに優秀で各省から  
の信頼も厚く、現在は宰相の  
補佐官を務めている。

ニケ

錬金省で事務員を務める  
ケット・シー。アイラたちの癒  
やしの存在。





転生錬金術師が契約夫を探したら、  
王子様が釣れました

*Contents*

---

エピローグ	第五章	第四章	第三章	第二章	第一章	プロローグ
	向日葵の咲く庭園で約束を	契約結婚のふたり	動き出す影	転生錬金術師の新婚生活	プロポーズは突然に	
279	224	158	115	59	14	6

---



## プロローグ



雲一つない青空の日。リンステッド王国王都にある大聖堂では、祝福の鐘の音が鳴り響く。吹き抜けの天井からはやわらかな陽光が降り注ぎ、今日の主役である花嫁——アイラ・ジェーンズを輝かせた。

彼女は子爵令嬢という身分でありながら、鍊金省の主任鍊金術師として国家の中樞を担っている。普段は白衣に身を包み、仕事に熱中しすぎて化粧っ気のないアイラだが、今日は違う。

艶やかな純白の絹のドレスには、国一番刺繍が得意な淑女たるアイラの母によって金糸で荘厳な花々の刺繍が施され、至高の一品とも頷かせる美しさをたたえていた。それを纏うアイラも決して見劣りせず、ミルク色の肌を飾り立てている。繊細なレースのベールに透けて見えるアイラの顔は、十九歳という少女らしい可愛らしさと、ほのかな女性の色香が共存していた。瑞々しい唇には薄桃色の紅が塗られ、幸せそうに弧を描く。

「花嫁よ、こちらへ」

大神官の威厳をたたえた声と同時に、涼やかなメロディーを楽団が奏でる。

アイラは父の腕に手を添えると、参列者たちの間を通るように一直線に敷かれた真っ赤な絨毯をゆつくりと歩く。父がうつすらと涙を浮かべ、少し離れた席に座る母と兄と弟も、泣いてたり笑っていたりして、アイラを祝福しているのが分かる。

絨毯の先、女神像の前には大神官と花婿が待ち構えていた。花婿は透き通る金髪に、優しげなエメラルドの瞳を持つ美貌の青年で、蕩けるような笑みを浮かべて、父に代わってアイラの手を取った。

——誰もが憧れる物語のような祝福された結婚！

と家族や参列者、そして大神官まで思う中、アイラは内心でこう思っていた。

(肩こるし、裾の長いドレスは動きにくいし、何より緊張する！早く仕事に戻りたいわ)

若いご令嬢たちからの恨みと嫉妬の視線がグサグサと突き刺さるのを鬱陶しく思いながら、アイラは花婿のご尊顔を見る……が、特に何も感じず、アイラはベールで隠れているのを良いことにジトツとした目を向けた。

(契約結婚なのに、なんでこんなお姫様みたいな盛大な結婚式を挙げないといけないの。……まあ本当の理由は分かっているけど。ちよつとぐらゐ現実逃避したいというか)

家族席には、貴族でありながらもちよつと庶民的なアイラの家族の他に、花婿の家族もいる。煌びやかな衣装に、深い歴史と計り知れないお値段がつく王冠を戴く王様。そして、同じく豪華な王太子、隣国の姫たる王太子妃……錚々たる顔ぶれだ。

(……親戚付き合いは最低限でいいって言っていたけど、国王が舅で、王太子が義兄で、王太子妃が義姉とか……異次元すぎて逆に笑えるっていうか)

アイラの結婚相手であるノア・ファビウス・リンステッドは、本来ならば遠い世界にお住まいの尊き第二王子様。顔良し、性格良し、家柄良し、ついでに財力も将来性もありという夫としては超・超優良物件。ご令嬢たちからの容赦のない嫉妬の視線の理由はこれだった。

貴族とはいえ子爵令嬢のアイラにとつて、ノアは雲の上の存在。

なぜ色気よりも食い気！ 食い気よりも実験！ なアイラが数多の麗しき武器を持った女性たちを蹴落とし、妻の地位を手に入れられたのか。理由はただ一つ。

（まあ、都合が良かったのよね。世の中の野心ある皆様ごめんなさい。わたしは愛のない契約結婚をして、思う存分錬金術師生活を楽しみます！ まあ、色々となんとかなる！）

明日の実験のことを考えているアイラを余所に、結婚式は肅々と進んでいく。

「新郎ノア・ファビウス・リンステッドは、ここにいるアイラ・ジェーンズを病める時も、健やかなる時も、富める時も、貧しき時も、妻として愛し、敬い、慈しむことを誓いますか？」

「誓います」

ノアの凍々しくもハッキリした声が大聖堂に響き渡る。これが嘘八百の言葉なんて、参列者の誰もが思わないだろう。

「新婦アイラ・ジェーンズ、あなたはここにいるノア・ファビウス・リンステッドを病める時も、健やかなる時も、富める時も、貧しき時も、夫として愛し、敬い、慈しむことを誓いますか？」

「はい、誓います」

穏やかな声音になるように頑張つてアイラは答えた。

「では、誓いのキスを」

大神官の言葉と同時に、アイラとノアは向き合う。そして慎重な手つきでノアがベールをはずす。(……本当に綺麗な顔。王子様みたい……というか、王子様だけ)

ノアの端正な顔立ちに純粹に感心していると、彼はアイラに甘い笑みを浮かべる。慌ててアイラも恭順するように微笑み、目を瞑る。事前の打ち合わせ通り、誓いのキスはアイラの唇の横にされた。

「偉大なるノア第二王子殿下と、新たなる王家の一員、アイラ・ジェーンズ・リンステッド第二王子妃に盛大なる拍手を！」

その瞬間、大聖堂に祝福の嵐が吹き荒れる。

生まれて初めて経験するスタンディングオベーションに恐れおののきながら、アイラの結婚式という名の契約調印式は終わりを告げたのだった。



結婚と同時に、アイラとノアには王宮東側の離宮が与えられた。

青を基調とした美しい外観で、広大な庭には芝生が均一に生えていた。この離宮は古くから王族に与えられている歴史ある建物で、アイラとノアの結婚に合わせてリフォームし、内装と家具を総取り替えしたそうだ。王族の結婚の経済効果に驚きつつも、アイラは与えられた自室でひとりベツ

ドに転がっていた。

王太子ほどではないけれど、第二王子の結婚式も過密スケジュールで、大聖堂での結婚式が終わった後も王都での小規模パレード、披露式典など慣れない行事でかなり疲れた。

「……ふう。意外と落ち着く」

シンと静まった部屋で小さく息づく。

元々実家のジェーンズ子爵家では使用人はそれほど多くなく、みんな庶民的だった。ここ三年ほどは一人暮らしをしていたこともあって、誰かにお世話されるのは慣れていない。

そのことを事前にノアへ話していたからか、離宮に入ってから侍女はおろか、使用人ひとり見当たらぬ。先ほどもひとりゆっくりとお風呂に入り、堅苦しかった結婚式の疲れを取った。

「うーん。でも、誰もいないって訳じゃないのよね」

ベッドの脇にあるサイドテーブルには、ゆらゆらと湯気の立つブランデー入りのハーブティーが置かれている。そしてカップの下には『ゆっくりとお休みください』と丁寧な文字で書かれたメッセージカードが添えられていた。

「忍者みたいな侍女でもいるのかしら。なーんてね！」

そんな馬鹿なことを零しながら、アイラはノアとの愛のない契約結婚について考えていた。

ノア&アイラの契約結婚三ヶ条

その一、互いの権利は対等である。

その二、互いの立場・事情を最大限に尊重すること。

その三、もしも好きな人ができたら、全力で応援すべし。

以上である。まあ簡単に要約すると、契約結婚中も契約破棄するときも思いやりを持って良きビジネスパートナーとして行動しましょう、ということだ。

細かく条約を決めすぎても、歳を取ったり、互いの事情が変わったときに面倒なので、これぐらいざっくりしている方が分かりやすい。何より、アイラの懸念事項である身分差による圧力をかけられないのがいい。

王族との結婚の最大の懸念事項である後継については、ノアもアイラも望んでいないし、お互いに恋愛感情もないので心配もない。ビジネスライクな結婚生活が送れそうだ。

「むっふふ。最初は王子様との結婚なんて無理って思っていたけれど、仕事も続けられるし、離宮から職場まで徒歩三分だし、万事順調ね」

一時はどうなるかと思っただけれど、アイラはどうか錬金省で働き続けることができる。契約結

婚万歳とハーブティーを一気飲みしていると、扉が控えめにノックされた。

「もしかして侍女かしら？」

深く考えずに扉を開けると、そこには結婚式の後に別れてから見ていない契約上の夫がいた。

「ノア、こんな夜更けにどうしたの？」

何か連絡事項があるのかなと思ひ、アイラはノアを部屋に入れようとするが彼の姿を見てピタリと動きが止まる。

先ほどまでお風呂に入っていたのか、ノアの髪はしっとり濡れていた。昼間のカッチリとした正装は解かれ、ゆったりとしたシャツにスラックスという、まるで今から寝るようなラフな格好だ。そして何より……。

(な、何故に枕を手を持っているのおおおお!!)

仮に契約妻に連絡事項があったとして、こんな格好で来るのか。まして、使い慣れていそうな枕を持参して。……絶対にあり得ないだろう！

あまりにも枕を凝視しすぎていたのか、ノアが困ったように頭をかく。

「実は枕が変わると深く眠れないんです。お恥ずかしながら」

そうじゃねーよ！ という言葉をアイラはどうか呑み込み、自分を落ち着かせるように、ゆっくりと冷静に言葉を紡ぐ。

「……あの、ノア。何か用があったのよね？」

穏やかにアイラが微笑むと、ノアは少年のような満面の笑みで頷いた。

「もちろん！ 愛するアイラとたった一度の初夜の儀を執り行うため——」

スパンツとアイラは勢いよく扉を閉めると、脊髓反射で鍵を閉めて近くにあったキャビネットやイスを扉の前に積み上げた。

そして深く、深く息を吸って吐くのをかれこれ十回ほど繰り返して、ドキドキと耳にまで聞こえる心臓の鼓動を落ち着かせた。

「契約結婚相手と初夜を共にする？ ないない、結婚初日に契約を破るとかあり得ないわ。きっと今見たノアは幻覚。そして、愛するとかなんとかは全部幻聴ね」

ドンドンと扉を叩く音が部屋に響くが、アイラはそれを頑張つて無視する。

……だが、その音は三十分経つても一向に止まず、ついにアイラはキレた。

「初日から契約破棄するつもり!? さすがに結婚初日で離婚とかあり得ないわ！ 社会的な信用をなくすどころか、親兄弟からも責められる！」

「契約結婚三ヶ条、その三。もしも好きな人ができたら、全力で応援すべし、ですよ。実を言うと、私はアイラにベタ惚れなんです。好きです、大好きです。私のこの溢れるばかりのあなたへの愛を、どうぞ存分に受け止めてください！」

「嫌よ！ そもそも、この結婚は契約。愛だの恋だのといった重苦しい関係じゃなくて、損得勘定の延長線上にある都合のいい関係じゃなくちゃいけないの！」

「好きな相手と契約結婚してはいけないなんて、そんな決まりはありませんよ」

扉越しでノアの表情は窺えないが、きつと爽やかに腹黒い笑みを浮かべているに違いない。結婚

初日にして、アイラは契約夫のキラキラフェイスの下に隠れた本性に気づく。

(というか、わたしが好きって何よ。師長に紹介されるまで、ノアとは言葉すら交わしたことがなかったはずだわ。この結婚はどこまで仕組まれていたというの！)

きつと何かの間違いだと思いたいが、この粘つくようなノアのしつこさに、アイラは彼の本気を感じ取り身震いする。

「契約結婚三ヶ条。その二、互いの立場・事情を最大限に尊重すること！ わたしは初夜を断固拒否するわ！」

「そこをなんとか……！ 哀れな私をお救いすると思って……添い寝するだけでいいですから」

「哀れなのはわたしよ！ だいたい、わたしのことを好きだとか抜かすヤツと添い寝なんて危なくてできるか！」

アイラとノアの攻防は朝日が昇っても続けられた。

こうして、前途多難な契約結婚生活は幕を開けたのである——



## 第一章 プロポーズは突然に



——契約結婚の発端は、三ヶ月前に遡る。

あるよく晴れた昼休み。アイラは食堂で包んでもらったサンドイッチを手に、ひとけ人気のない東屋で実験ノートを書き込みながら、いつも通りに昼食をとる……はずだった。

東屋の中で昼食をとっていると、視界に影が差した。雨雲でも近づいているのかなと顔を上げると、誰かがアイラを見下ろしている。

逆光で顔が見えない。しかし、背の高さから相手が成人男性だと分かり、驚いたアイラはとっさに逃げようとする。だが、それを許さないとばかりに腕を掴まれた。

「アイラ・ジェーンズ子爵令嬢。俺と結婚してください」

「へ？ ええ？ うええええええ！」

動揺からおよそ淑女とは思えない奇声を上げてしまっていた。

アイラは東屋の柱に縫い付けられるように迫られ、腕を掴んでいる青年と今にも口づけしてしまいたいようなほど距離を詰められる。

何がどうなっているのか分からない。青年の顔を遅れて認識し、アイラはますます混乱した。

宵闇の空のような美しい藍色の髪に、高潔さを表すかのような深い青の瞳。騎士のような均整の取れた身体からだ。伶俐な印象を抱かせる精巧な顔立ちだが、今はただ情熱的にアイラを見下ろしている。

なんと青年は王宮内でも屈指の有名入——外交部のホープであるカーティス・ウエストーン公爵だったのだ。

（いやいや、待って！ ウエストーン公爵がなんでプロポーズを？ しかも、爵位が高い訳でもない、研究中毒のわたしに？）



令嬢たちが抱かれない男第二位、結婚したい男第一位、今注目の文官第一位、罵られたい殿方第一位……などなど、交友関係の広い友人に植え込まれたカーティスのどうでもいい情報がアイラの脳内に駆け巡る。

「ひ、人違いでは？」

狼に追い立てられる羊のように顔を真っ青にさせながら、アイラは絞り出すように呟いた。

すると、カーティスの深い青の瞳が細くなる。彼の整った顔立ちに僅かな怒りの感情が足され、それはそれは恐ろしいことになっていた。

カーティスが見下ろすように顔をさらに近づけると、彼の艶やかな黒髪がアイラの頬に触れる。

「俺は最初にアイラ・ジェーンズ子爵令嬢と言っただろう。間違えていると思うか？」

「そ、そうですね。ですが、あの……わたしはしががない子爵令嬢ですし。ウエストン公爵とは釣り合いがとれないといえますか……」

「幸いなことに、我がウエストン公爵家は妻側の身分が高位でなければいけないほど困窮していない。それにアイラ嬢の生家は、国一番の農業生産率を誇る。母君は社交界でも一目おかれ、兄君と弟君も将来有望だ」

アイラの生家、ジェーンズ子爵家は一つのことのめり込みやすいオタク気質だった。父は平民たちと一緒に日焼けしながら領地で品種改良や農業に勤しみ、母は刺繍オタクで精魂込めて作った作品を社交界で披露した後、それを気に入ってくれた人にあげたり、商会に卸したりしている。

兄は小さい頃からヒーローごっこが大好きで、その延長線で近衛騎士となり王族を警護している。

弟は読書オタクが高じて学校で優秀な成績を修めていた。

(……もしかして、うちの家ってただのオタクじゃなくて、世間的にはエリートなの!?)

みんな好き勝手に生きていただけなので、アイラは今までジェーンズ子爵家の価値なんて考えたこともなかった。家族の誰ひとりとして自分のことをエリートだなんて思っていないだろう。だって本人たちは楽しくオタ活しているだけなんだから!

「えっと、その……農作物の取引だったら父に話してみますし、母は若い男性と話すのは好きなので、刺繍作品は簡単に譲ってくれると思います。兄と弟に会いたいなら、紹介しますよ?」

「アイラ嬢は何か勘違いをされているようだ」

「……か、勘違い?」

嫌な予感をして、頬に冷や汗がたらりと流れる。

「俺が一番尊敬しているのは君だ」

「わたし!?!」

「女性ながらその若さで国一番の錬金術師になっている」

「いえ、宮廷錬金術師の筆頭はユージン・レイノルズ師長なんですけど……」

直属の上司の名前を言うと、カーティスの眉間に皺が寄る。

「あんなのはただ世襲しただけの三流だ」

嫌悪感丸出しにカーティスが言った。ユージン本人がこれを聞いたら、泣きながら気絶するだろう。……事実なだけに。

「あの……客観的に見て、わたしはエリート錬金術師だったりしますか？」

今まで気にもしていなかった自分の世間の評価を恐る恐る聞くと、カーティスは先ほどとは打って変わって穏やかな笑みを浮かべた。

「あなたは独創的かつ有益な金属物質とポーションをいくつも開発し、建設業や造船業を飛躍的に発展させ、医療の分野では平民を中心に死亡率を大きく下げた。多大なる功績だ」

「わたしはただ……自分が作りたいものを作っていただけです」

欲望の赴くまま作ってきたものが、自分の想定を超える高評価を得ていると知ると、何故か嬉しさを通り越して恐怖を感じた。努力をいくらしめても学校の成績が次席で、褒められるというよりは哀れまれてきたアイラには刺激が強すぎる。

「アイラ嬢の自然と誰かのためになる行動をしようところが、俺は好ましく思っている。是非とも、俺と結婚した後もウェストン公爵家でその力を存分に發揮してほしい」

「それは……仮にウェストン公爵と結婚したら、宮廷錬金術師を辞めないといけないということですか？」

「君をあんな劣悪な環境で働かせ続けることなんてできない！ レイノルズ公爵家が世襲しているから、実力があっても決してこれ以上の出世は望めないだろう。それに、ウェストン公爵家ならば、王家に搾取されることもない」

カーティスの必死な物言いに、アイラは虚を衝かれる。そしてキュピーンと脳内にある考えが天啓のように降り立った。

……これは間違いない。結婚詐欺だ!!

錬金術師になるには資質を持っていないなければならない。しかしその資質の一つである——魔力を持つ者は極端に少なく、そして魔力を持っているからといって必ずしも錬金術師になれる訳ではない。

錬金術とは数学、地学、生物学、占星術、統計学、魔術などあらゆる学問を統合し、自身の創造力を駆使して未知を作り上げる技術。睡眠や食事を減らしてでも膨大な実験や考察を喜んでやるぐらいのオタクでないと錬金術師にはなれないのだ。

なので、国内に錬金術師は三十人もいない。当然、お給料も高い。金食い虫と揶揄されることもあるが、優秀な者であれば巨万の富をもたらす。故に、貴族たちはこぞって錬金術師を領地に囲い込もうとするのだ。

(まあ、その中でも宮廷錬金術師のお給料は最安値んだけど!)

王宮の財務部はお金に厳しく、他の職員たちの給与との兼ね合いが、とか言って宮廷錬金術師の給与を上げてくれない。なので、宮廷錬金術師となった者は名前を適当に売って、数年で貴族に引き抜かれるのが常である。

(でも酷いわ! 引き抜きじゃなくて、結婚詐欺を働こうとするなんて)

カーティス・ウェストン公爵は現在、妻の家柄を頼ることがないほどに安定した地位を築いてい

る。であれば、妻に求めるのは心から愛する者。もしくは……個の能力が有益な人物。それで目を付けられたのがアイラだ。

錬金術師を普通に雇用して多額の給与を払うよりも、妻にした方が断然安く済むし、他領に引き抜かれる心配もないと思われたのだろう。

「わわわ、わたし、お付き合いしている人がいるんです！ だからウエストン公爵と結婚はできません」

「……ほう。それは事実なのですか？」

静かに……しかし、追及するかのような威圧を込めてカーティスが言った。アイラはしどろもどろになりながらも、必死に言い訳を考える。

「事実ですよ。もう砂糖菓子よりも甘い関係で、将来を誓い合っています。ま、まさに運命って感じ……お互いしか目に入らないというか……」

本当は十九年の人生の中で男っ気の一つもない事実が心を抉る。侘しい仮想彼氏を思い浮かべながら、なんでアイラがこんな言い訳をしなくてはならないのだろう。

「こうしてアイラ嬢に直接求婚に来たのは、せめてもの気遣いだ。いきなり結婚相手が決まっていたら、驚くだろう？」

カーティスはアイラの髪を一房手に取り、そつと口づける。

「俺があなたを幸せにしてみせる」

普段は怜悧な印象を与える青の双眸が優しげな三日月型に細まり、艶のある低い声音が耳朶じだに響

く。

カーティスのまるで少女漫画のヒーローのような甘さとほどよいD Sっぷりに、アイラは顔を真っ赤にさせ、胸の高鳴りが抑えられない。

（恐ろしい！これが外交部仕込みの結婚詐欺師の手管なのね。詐欺だと分かっているのに……思わず全財産を差し出してしまおう！）

餌食にされる前に逃げなければとアイラが藻掻くように手を振り回すと、思っていたよりもあっさりとカーティスの腕の拘束が緩んだ。

「しっ、失礼します！」

慌てて逃げ出すアイラの後ろで、カーティスがくすりと笑ったような気がした。



突然だが、アイラ・ジェーンズは転生者である。

十二歳の時、家族旅行で初めて海を訪れて、自分の前世が日本という国で生きていた人間だということに漠然と思いついた。性別はおそらく女性。年齢や家族構成、名前などを詳しく思い出すことはできなかつたが、日本の風景や知識は良く覚えている。

そして憶れた。

舗装された道はどこまでも続き、ビルや家屋が立ち並びながらも、手入れされた花や木々が美し

く生い茂る。子どもたちは等しく学校に行くことができ、電気やガスや水道など、ボタン一つで魔法のような生活が送れる。

国外にも簡単に行けて、様々な国々を見ることができ、誰もが世界には自分の知らない文化や風景、知識、歴史が広がっていることを当たり前前に知っていた。その当たり前前にアイラは好奇心をくすぐられた。

一度きりの人生をこの国の中だけで終わらせるなんてもつたない。アイラは生まれ落ちた世界のすべてが見たかった。

そんな強欲な夢のために、アイラは錬金術師となったのだ。

「どうしよう、どうしよう、どうーしーようっ！」

アイラは頭を抱えながら王宮の廊下を歩いていた。すれ違う人たちがギョツとした目でアイラを振り返るが、今は気にしている余裕なんてない。

詐欺とはいえ——いいや。詐欺だからこそ、カーティス・ウェストン公爵に求婚されたという事実が背筋が震える。

「相手は外交部のホープ。わたしの苦しすぎる言い訳なんて、最初からお見通しだろうし……本当はどうしよう！」

外交官は相手の情報を集め、分析し、己の利になるように周りを動かし説得するのが得意だ。ア

アイラの身辺調査もとうに済ませて突撃してきたのに違いない。

「わたしの研究三昧の自堕落おひとり様生活についても調べているはずだわ。お付き合ひしている人がいるって言ってしまったけれど……絶対に嘘だってバレてる」

結婚詐欺をするのなら、恋人のいる女性よりもいない女性の方が断然罠に嵌めやすい。そういうところも込みでアイラが選ばれたのだろう。

「相手は公爵。身分的に断れないわ。しかも日々、欲望のまま生きているお父様とお母様にウエストン公爵から縁談を持っていかれたら、面倒くさいとか言って適当に了承されるかもしれない。娘に一言ぐらい確認する良心があると信じたいけれど……」

ブツブツと呟きながら、アイラは王宮の端にある煉瓦造りの建物に入った。玄関を抜けてすぐの扉を開くと、机が並び、たくさんの書類が積まれた事務室に出た。

珍しく事務室には三人の職員がいた。

「アイラ・ジェーンズ。休憩から戻りました」

そう声をかけて自分の机に向かうと、隣でマニキュアを塗っている美女が視線を爪に向けたまま口を開く。

「いつもなら書き物に熱中してなかなか帰ってこないのに、早かったわね」

彼女——ジュディ・ミリガンの長い黒髪はサイドに垂らすように結ばれ、知的な整った顔立ちに紫の瞳を持つ。第一印象は落ち着いて清楚なイメージの美女だけれど、アイラは彼女の俗っぽいところをよく知っている。

ジュデイはアイラの同僚であり、同い年の友人。同じ貴族階級で、彼女の家は祖父の代で男爵を拝命していた。そしてこの国にある錬金術師の学校で共に学んだ仲である。

「……今日はちょっと気分が乗らなくて」

「やりかけの実験があるでもないのに。珍しいこと」

「ねえ、ジュデイ。最近の王宮の男情報……どうなっているの？」

さりげなく聞くと、ジュデイはマニキュアを乾かすため、フツと爪に息を吹きかけた。

「王太子殿下が結婚してからというもの、特に独身の優良物件たちの動きはないわね。次期王の結婚式ともなると国内だけじゃなくて他国も動くから、どこの部署も忙しかったじゃない？ みんな恋愛も政略結婚もする暇がなかったみたいね。結婚式が終わって三ヶ月経ったし、そろそろ男を狩るのに良い時期になってきたんじゃないかしら」

「か、狩り……」

清楚な見た目からは想像もできない肉食系なセリフに、アイラは苦笑いをした。

（……でも、ジュデイはこの王宮内の恋愛ゴシップネタでは一番の情報通。なのにウェストン公爵の小さな噂すら流れていないということは、用意周到に結婚詐欺を働いているって訳ね）

アイラは多少給与が安くとも、宮廷錬金術師を辞めるつもりはない。何故なら、宮廷錬金術師は公共事業に深く関わることが多く、また生み出した技術が広まるのも早い。国を豊かにするという意味では、一番の近道だ。

（わたしは、豪華客船で世界一周旅行をするまで結婚なんてしている暇なんてないのよ！）

悶々と考えていると、ジュデイがずっとアイラに顔を近づける。

「アイラが恋バナなんて珍しいわね。なあに？ 狩りたい男でもできたのお」

「で、できないわよ」

「焦るなんてますます怪しい。まあ、研究馬鹿のあなたが男女の秘め事に興味を抱くのはいいことじゃない？ なんとというか、年相応の人間って感じ」

「……ものすごく失礼なことを言っていない？」

アイラが顔を顰めると、ジュデイはニッコリと笑みを浮かべた。

「言っているわよ」

「ジュデイ！」

声を荒らげるアイラを止めるように、もふもふとして——それでいて、日だまりの匂いにする大きな猫がそと仲裁に入る。

「まあまあ、喧嘩はそれぐらいにするですよ」

「ニケ先輩……申し訳ありません」

大きな猫、ニケはだいたいアイラの腰ほどの大きさで二足歩行だが、それ以外に人間の要素はない。くりりとしたつぶらな瞳に、しなやかでありながらまん丸の体型、艶がありながらもしっとりもふもふとした毛並みの特徴のとってもキュートな猫の顔立ちで、彼はアイラを——この王宮のストレス社会に生きる人間たちを魅了して止まない。

種族はケット・シーという、この世界でも珍しい存在。リンステッド王国からかなり離れた場所

にケット・シーの里があり、友好国として古くから交流があると噂で聞いた。ニケは、この国で人間社会を学ぶために働いているそう。

ニケの性格は真面目。元々は別の部署で働いていたが、あまりの愛らしさに各部署で取り合いが起こり、人材と癒やし不足に嘆いていた宮廷錬金術師長が謀略を巡らせて、数年前にニケを勝ち取った。この部署に入ったのは一番遅いが、王宮での勤務歴が一番長い。錬金省では事務員として働いている。シャツとネクタイ、そして革のブーツをオフィスカジュアルに着こなす様は、ニケがすっかりと人間社会に順応していることを示していた。

「そうよ。落ち着きなさい、アイラ。狩場——じゃなくて、男女の楽しい食事会にはちゃんと呼ぶから」

「それは別にいい。ジュディは、まだ玉の輿を諦めていないの？」

ジュディは錬金術の豊かな才能があるから、自分で身を立てることも可能だ。しかし、彼女は学生時代から、優先順位第一位はいつも将来有望のイケメンだった。

「当たり前でしょ。尻に敷きやすい玉の輿の良い男を見つけるために、あたしは宮廷錬金術師になったのだから」

「玉の輿はよろしいですが、愛のある温かい家庭の方が尊いと思いますにゃ。好きな人と結婚できることほど、幸せなことにはやいずにゃ」

真つ当な人間の意見をケット・シーのニケが言った。すると、ジュディが口を出す前に、長身の男性が現れ、軽快な声を上げる。

「ボクは政略結婚もいいと思うヨ。結婚は博打だからネ。好きになった人が自分をずっと大切にしてくれるとは限らナイ。政略結婚なら、情熱的に愛されずとも、相互利益を享受するために最低限には大切にしてくれるダロウ」

この男性の名前は、ロウロウ。性別以外はすべて不明。何故なら、怪しげな異民族の仮面と衣装を身につけ、所々片言で言葉を話すため、何歳なのか、この国の人間なのかすら分からない。

錬金術の中でも占星術を専門とするらしいが、彼がそれらしい占いをしていると誰も見ることがない。占いをやったとしても、辺境国のマイナー占いを適当にやったりと趣味の範疇を超えない。勤務態度も不真面目で欠勤、昼寝も当たり前。それなのに、何故かクビにならない謎多き同僚だ。

アイラたちの会話に入ってきたのも特に意味はなく、ただの暇つぶしだろう。

「ロウロウくん、悲しいことは言わないでくださいにや。政略結婚とは、家同士の利益のために決めることにやのでしょう？ 犠牲になるのは、うら若きご令嬢たちだけにや」

「好き合って結婚して、後々浮気……なんてこともあるヨ。ケット・シーにはないのカナ？」

「そ、そんな紳士の風上にも置けないようなヤツは……少数派ですにや」

「いることにはいるんじゃないカ」

可愛い猫にしか見えないケット・シーの夢のない一面であった。

「にやらば、若いご令嬢たちに聞いてみましょう！ 政略結婚がいいのか、恋愛結婚がいいのか」

「そうだね。幸いにもここにはふたりいるしネ」

そう言つて、勝手にヒートアップしていたニケとロウロウが、ジュデイに鋭い視線を向ける。

「えー、あたしは金をたんまり稼いで自由に使わせてくれれば、好きじゃない人と政略結婚しても、余所に女を作ろうとどうでもいいけど？」

「……ジュデイ。お、男は金じゃないと思うナ」

男の夢が破れたとばかりにロウロウの声は気落ちしていた。

「あたしみたいな美人を妻にできるのよ。なら、相応の対価が必要だと思わない？　結婚は取引だ  
と思うけど」

「悲しすぎる答えだにゃ……」

ニケは尻尾をだらんと下げて、しょんぼりと床を見る。

「アイラはどう思うんダイ？」

「え!?　そもそも結婚したくないです。研究の邪魔なので」

咄嗟にアイラは取り繕うことなく答えてしまう。するとロウロウまで、ニケの隣で同じくしょんぼりと項垂れた。

「……この国の未来は暗いネ」

「人間とは……いいえ、女性とは複雑ですにゃ」

一人の男と一匹の雄の心は一つだった。

「別に他人の恋愛なんてどうでもいいでしょ。外から見たら不幸でも、本人たちから見たら幸せ  
てこともあるわ。その逆も然り。大事なのは自分がどう思うかよ」

ジュディはマニキュアを乾かしながら、面倒くさそうに溜息を吐いた。

アイラはジュディの言葉を頭の中で反芻させる。そしてある案を思いついた。カーティスから仕掛けられた結婚詐欺を回避するには、これしかない。

——そう、契約結婚だ!!

政略結婚のような家同士の利益のためではなく、個人同士の私情を絡めた契約結婚ならば、アイラが研究を続けながらカーティスから逃げることができる。

だが問題は、どうやって契約結婚相手を見つけたかだ。

「……わたしの全財産と地位で罫を仕掛けて……いや、それだと邪魔されるリスクもあるし……」  
「どうしたのよ、アイラ。ブツブツ言ってる意味が悪いわ」

ジュディが引いた目でアイラを見てくるが、そんなことを気にしている余裕はない。研究してるときよりも必死に脳を回転させていて気づいてしまったのだ。

「……どうしよう。わたしの人脉と情報網じゃ、どう足掻いても契約結婚相手が見つけれない!!」

まず、普段研究ばかりして錬金省に閉じ籠もり、家には寝に帰るだけの生活を送っているアイラは、交友関係がかなり狭い。夜会や御茶会にもデビュータレント以来出席しておらず、貴族間の力関係にも疎い。当然、味方になってくれる高位貴族もない。

(相手はカーティス・ウェストン公爵よ。下手に低い身分の相手を選んでしまえば、強引に契約結婚を取り消されてしまう。かと言って、交友関係の狭いわたしが急に上位貴族に接触すれば、怪しさ満点。すぐに契約結婚を企んでいることが見破られてしまうわ)

もっと人間関係や社交に力を入れるんだったと後悔しても後の祭り。アイラは声にならない呻き声を上げながら、床に膝をついて頭を抱えた。

「ふう。やつと予算会議が終わったよ」

扉を開く音と共に、気の抜けた声が事務室に響いた。

現れたのは錬金省のトップ。ユージン・レイノルズ宮廷錬金術師長である。スラリとした長身に、短く切り揃えられた銀髪に、黒曜石のような瞳。精悍で整った顔立ちをしているはずだが、疲れ切った表情が二十六歳という年齢よりも少し老けた印象を与えていた。

よれよれの白衣に貴族服というちぐはぐな格好をしているが、ユージンの身分は公爵。錬金術師としての能力は……正直、三流だった。

「ああ、ユージン。会議の結果はどうだった？」

「三ヶ月前からニケと準備していたから、なんとか来年の予算も現状維持を確保することができた」

ユージンは猫背になりながら、胃の辺りを優しく擦る。

「予算を削減すると、財務部はかなり息巻いていたからよかったヨ。こんな楽な仕事、絶対に手放したくないからネ」

ナチュラルにクズ発言をするロウロウに、今更錬金術師たちは反応しない。しかし、この中で一番の常識人で良心の塊であるニケ先輩は、キュートな頬を膨らませて、ロウロウに何度も猫パンチを練り出した。

「錬金省が財務部に印象が悪いのは、ロウロウくんのせいでもあるのですにゃ。少しは真面目に働かにゃいと、本当にクビになってしまいますにゃ!」

「アハハ! ボクは無理な労働とか、責任とかが大嫌いなんだ。いい加減、諦めたらどうダイ?」  
ぷにぷにの肉球ではあまりダメージが 아니라しく、ロウロウは胸を反って笑うだけだった。

いつも通りのじゃれ合いを見たユージンは、アイラが調合した胃に優しい徹夜用栄養ポーションを取り出し、それを一気に飲み干した。

「まあ、なんにせよ。これで肩の荷が下りたね。日に日に酷くなっていた胃痛も改善されるだろうし、これで心置きなく研究ができるよ!」

穏やかに微笑むユージンを見て、アイラはひらめいた。

(契約結婚相手が見つけれられないなら、上司を使えばいいじゃない!)

傍若無人な発想だが、これはなかなか悪くない。ユージンの仕事は錬金省のトップとして、各部署との交渉や伝達、国の行く末を左右する重要な会議、邪魔な部署や人物への牽制、王家へのご機嫌伺いなどなど、数多の面倒な仕事をまとめて請け負っている。

おかげで錬金術師としては三流だが、交渉役としては非常に優秀だ。若くして家督を世襲し宮廷錬金術師師長になったユージンだが、部下たちからはとても信頼されている。何故なら、錬金術師



りそうになった。恐ろしい交渉術だ。危なかった。

「……その交渉スキルの三分の一でも錬金術に応用できれば良かったですね」

「自分でもそう思うよ!? でも僕はロビー活動が嫌なんだ。交渉するのは怖いし、人に恨まれると胃は痛くなるし……本当はみんなみたいに、ただ錬金術の研究だけしたいんだよ」

自分の得意なことが好きなことが合致しないのは不幸なことだと、アイラは胃痛持ちのユージンを見て思った。

「それは無理です。師長以外のメンバーは協調性がありません。交渉なんて無理です。一番の人格者のニケ先輩ですら、唐突にお昼寝タイムとか始めますからね。猫だから」

「ううっ……アイラ主任も役職持ちなんだから、少しは手伝ってくれども……」

「手伝っているじゃないですか。予算をもぎ取る交渉の手札として」

「じゃあ、役職を交換しよう!」

妙案とばかりにユージンが手を叩く。

「できる訳ないじゃないですか。だいたいレイノルズ公爵家の一番の仕事は、宮廷錬金術師たちの統率をとることでしょう? 宮廷錬金術師たちの信頼を勝ち得るために、これからもユージン師長には他部署との交渉を頑張ってもらわないと」

「そんなの建前で僕に面倒な仕事を押し付けて、君たちはただ自分の知的好奇心を満たしたいだけなんだろう!」

「当たり前です。錬金術師なんですから」

思わず本音で言ってしまった、アイラは慌てて口を押さえた。「今のは嘘です」と言い訳しようとしたが、ユージンは泣きながら床を叩いた。

「僕だって錬金術師だよ！ それなのに、錬金省の強たく張りの腹黒狸だとか、三流錬金術師なのに恐怖で宮廷錬金術師たちを支配しているだとか、三度の飯よりも謀略と金が好きだとか、錬金省で二ヶを専有するために三十人ばかり社会的に抹殺しただとか……僕はただ、普通の錬金術師になりただけなのに！」

同僚の愚痴には共感できるのに、上司の愚痴は少し鬱陶しい。これってなんでなんだろう。

アイラは一頻りユージンの愚痴を聞き流すと、静かに彼に問いかける。

「……そろそろ、わたしのお話を聞いてくれますか？」

「えっと、アイラ主任が錬金省を辞めるかもしれないって話だよ。やっぱり予算が足りない……とか？」

「お金の話ではないです」

「働きすぎで自分の時間がない。留学や旅行なんかで長期の休みが欲しい、とか？」

「休日を楽しむ暇があったら仕事をします」

「はっ、まさか……ロウロウのウザさに嫌気が差したとか？ 彼は遊んでばかりの給料泥棒だけど、悪いヤツじゃないんだ。ただちょっと……天然にウザいだけなんだ！ あと、国王陛下のお気に入りだから、迂闊にこっちも注意できないんだ。許してくれ！」

「それ全然フォローになってないですよ。ちなみにわたしの錬金省での人間関係は円満です」

「じゃあ、何に悩んでいるの？　まだ、恋愛や結婚で悩むはずがないし……」

「それです」

アイラが指をパチンツと鳴らすと、ユージンは目をぱちくりとさせた。

「えっ、恋愛や結婚で悩んでいるのかい!?」

「……わたしが恋愛や結婚で悩んじゃいけないんですか?」

「そうじゃないけど……本当に？　万年、研究中毒で家にも帰らず、不気味な笑みを浮かべながら研究室に引き籠もって仕事している、残念錬金術師のアイラ主任が……恋愛？　結婚？　嘘だ……絶対にあり得ない。そんな訳がない!」

「いいから、わたしに適当な結婚相手を見繕いやがってください!」

上司とはいえ、あまりに失礼な物言いにアイラはユージンの襟首を掴んで強引に何度も揺さぶった。

「ア、アア、アイラ主任!　ゴミを見るような目で見るのはやめて!」

「さっさと出すもんだしやがれ!」

「ひいつ、口調がゴロツキみたいだよ。というか、結婚相手を『はい、どうぞ』と簡単に出せるはずがないだろう!　いいから、詳しい話を聞かせて!」

アイラが東屋での出来事を事細かに話すと、ユージンは驚愕と不安に押しつぶされそうな顔に何

度もなりながら、最後まで口を挟まずに聞いた。

「……カーティスがアイラ主任にプロポーズ。意外だ。てっきりもつと色気のある女性が好きなだと思っていた。少なくとも、実験台の上で食事をしながら寝るようなアイラ主任は守備範囲外だとばかり……」

「失礼な！ 食事と睡眠が一緒にできれば、もつと研究時間を増やせると思って試しただけです」  
「その発想が怖いよ。最低限、食事と睡眠は分けようね。自分が人間だということを忘れちゃいけないよ。そして、お願いだから有給を使ってね。労働環境が悪いんじゃないかって、宰相に怪しまれているんだから！」

個人研究室が与えられて、残業と泊まり込みが許可されているなんて、最高の労働環境だとアイラは思った。

「この上なく、好条件の労働環境ですけど……って、それよりも、ユージン師長。さっきの物言いだと、カーティス・ウェストン公爵とお知り合いなんですか？」

アイラが問いかけると、ユージンは苦笑いをしながら頷いた。

「同じ年でお互いに公爵家の次期当主として生まれたからね。子どもの頃は何かと交流はあったよ。大人たちも王太子と第二王子の側近候補として見ていたしね。まあ、成長してからはお互いの派閥の関係とかもあって、仕事以外で会うことはないけれど」

「高位貴族は大変そうですね」

「僕みたいな心が小市民の人間が、どうして公爵家になんて生まれてしまったのか……まあ、僕の

貴族事情なんてどうでもいいんだよ。問題はアイラ主任だ」

そう言つてユージンは再び胃の辺りを擦つた。

「アイラ主任はカーティスと結婚するつもりはないんだよね？ 確か、ジュデイが……最上級の獲物——じゃなくて、令嬢に人氣の婚候補だと言つていたと思うんだが」

「ジュデイが舌なめずりするような獲物が、わたしに本気で恋をしている、と。そんなの鶉呑みにするほど、わたしは馬鹿じゃありませんよ。ウェストン公爵はわたしの錬金術師としての能力が目当てです。巧妙な結婚詐欺ですよ！」

「確かに。上質なステークや菓子が目の前にあるのに、わざわざ葉臭そうな珍珠に手を出す馬鹿はいない。そうか、カーティスは珍珠を他に売りつけるつもりなのか」

ユージンはハツとした顔で言つた。アイラは彼にジトツとした視線を向ける。

「……状況を把握してくれたのは嬉しいですけど、ものすごーくわたしを馬鹿にしていますよね？」

「し、してないよ。アイラ主任は自慢の部下だからね」

ユージンの目が泳いでいる。アイラは小さく溜息を吐くと話を戻した。

「差し当たつて、ウェストン公爵との結婚を回避するため、外堀が埋まる前に適当な相手と契約結婚したいんです。どこかにいませんか？ 隠し子が十人以上いる浮気男とか、引き籠もりニートのダメ男とか。この際、よぼよぼの御爺様でも飛び跳ねて喜びますよ」

「そ、そんな人間、部下で紹介できる訳がないだろう！」

焦るユージンに、アイラはふふんと鼻を鳴らす。

「大丈夫です。結婚したら、即別居。お互いの私生活には一切干渉しません。わたしは変わらず王宮で働くんで、ユージン師長も嬉しいでしょう?」

「駄目駄目! アイラ主任に変な男を紹介できないよ」

妙に強いユージンの拒絶にアイラは首を傾げる。

「でも、相手は公爵の身分。訳ありの男性じゃないと、契約結婚に乗ってくれなそうです。その辺りの事情も考えて、顔の広いユージン師長なら良い相手を見繕ってくれますよね」

「駄目駄目駄目駄目! もっと慎重に行動しよう。僕がアイラ主任に恋人がいる噂を流してみるから。少し様子をみよう。ね?」

「相手はキャリア街道を驀進ざくえんしているエリートですよ! 悠長に構えていたら、あつという間に外堀を埋められてウエストン公爵家に出荷です。そうなったら、ユージン師長は責任をとれるんですか? 財務部のケチケチ文官たちが、嬉々として予算を減額してきますよ!」

「そうは言っても……」

なおも言い淀むユージン師長の前に、アイラは考え込む。そしてすぐに、妙案が閃いた!

「ユージン師長がわたしと結婚すれば、すべて問題が解決するのでは? いいですね。そうしましょう!」

「僕にだって選ぶ権利はある! もしも、そんなことになったら……考えただけで恐ろしい!」

ユージンは顔を真っ青にさせ、この世の終わりかのように頭を抱えた。

「大袈裟ですね。ジョウダン、デスヨ」

アイラは少し片言になりながら答える。

(……本当にどうしようもなくなったら、土下座してでもユージン師長に頼み込むことも考えなきゃね)

そんな考えを読み取ったのか、ユージンはアイラの両肩をガツシリと掴む。心なしか、彼の目が据わっている。

「分かった、分かったよ。アイラ主任の契約結婚の相手はこちらで候補を選定する。幸いなことに、カーティスは敵も多い。候補のあてはあるから……一週間ほど時間をくれるかい？」

「さすが仕事が早いですね。ウエストン公爵とうっかり接触しないように、わたしはしばらく研究室に籠もります」

「僕は研究がしたかったのに……」

あまりに恨めしい声に、アイラは罪悪感を刺激される。

「……あの、もちろんユージン師長にお礼は用意します。ご希望とあらば、栄養ポーションと特製胃薬を一生作りますよ」

「本当かい!? ……ついでにドラゴンの角もくれると嬉しいな」

「どうしてそれを!? 先週、闇市で手に入れたばかりなのに!」

ドラゴンの角とは、希少な錬金術の素材として有名だ。一般の商会では、なかなか流通しないそれを、アイラは大金と錬金加工した金属と引き換えて秘密裏に手に入れていた。

この事実を知られば、国から罰を与えられて素材を没収されるというのは分かっていたので、アイラは変装し、自分を偽ってまでして購入したのだ。誰にも見つかっていなかったはずなのに、アイラは目を大きく見開いた。

「くれるのかい？ くないのかい？」

か弱い小動物のような目をしながら、ユージンはアイラへ一步を踏み出す。

アイラの答えは、決まっていた——というより、決めざるを得なかった。

「……うっ、ぐう……献上させてください」

「うんうん。ドラゴンの角は僕も前から欲しかったんだ。なんの研究に使うか」

「……あの、全部がユージン師長の手の上だったってことはありませんよね？ 最初から、ドラゴンの角が目的だったとか。本当は胃薬なんて必要ない身体なんじゃないですか？」

ユージンは子どものように数回飛び跳ねると、ピタリと動きを止めた。

「そんなことないよ。ドラゴンの角が手に入ると思って、自分を鼓舞させなきゃと思ってね。だって……少しでも立ち回りをしくじったら……こぶっ」

ユージンはニッコリと笑みをアイラに向け、そして前触れもなく真っ赤な吐瀉物を吐き出し、ぐらりと床に倒れた。

「ユージン師長おおおお！」

「なんか……お花畑が見えるよ」

アイラが駆け寄ると、ユージンは焦点の合わない目で天井を見つめる。

(わたし、そんなにユージン師長の負担になることをした!?)

元々、ユージンの仕事の中には、私生活がめちゃくちゃになりやすい宮廷錬金術師を支えることも含まれている。こういったことでユージンが動くのも通常通りのはずだ。

(ニケ先輩の癒やしを求めて争奪戦が起きて全部署が敵に回ったときも、ロウロウが陛下の大事にしていた壺を割って姿を晦ましたときも、ジューデイに振られた男が逆恨みして刃物を持って錬金省に殴り込みに来たときも、胃薬を飲むだけで吐血までしなかったわ)

「契約結婚相手選びが失敗しても、別にわたしはユージン師長を責めたりしませんよ。もっと気楽にやってください!」

アイラがユージンの恐れを取り除くように手を握ると、いきなり彼の全身が震えだした。

「ふ、ふふ、ふふふっ……僕が死んだら……せめて、ドラゴンの角と一緒に埋葬してくれ……ああ、ささやかな家庭の幸せが見た、かった……」

「物騒なこと言わないでください!」

ユージンはすぐに意識をなくしたが、翌日には普通に起き出した。

同僚たちが、予算会議の心労が溜まっていたのだらうと言っていたので、アイラも納得するのであつた。



ユージンが契約結婚候補を見つけたと連絡してきたのは、三日後のことだった。

契約結婚候補との密談に指定されたのは、鍊金省の端にある建国当初からあるとされる古びた建物。そこは歴代の宮廷鍊金術師たちが古い資料や失敗作のガラクタを無造作に放置し、危険すぎて一般人は決して立ち入らない魔窟と化していた。もちろん、現役宮廷鍊金術師たちも減多なことでは近寄らない場所だ。

アイラは怯えるユージンを連れながら、忍者のようにコソコソと建物に入ると、書物が保管されている比較的マシな奥の部屋へと入った。昼間だというのにそこは薄暗く、曇りガラスからは弱々しい光しか入らない。じつとりとした湿り気を肌を感じながら、アイラは手に持ったランタンに魔力を流す。

「光あれ」

ランタンの中に入っていた小さな金属が黄金色に変わり、まるで蛍光灯のように部屋の隅々にまで光が行き届く。蛍金ほたるがねと名付けたこの金属は、アイラが鍊金術で開発した物だ。

「いつ見てもアイラ主任の蛍金は便利だよね」

「でもこれはわたしの魔力にしか反応しませんし、一般化するにはまだまだ改良が必要……って、実験したくてウズウズしてきたわ！」

「……研究熱心なのはいいけれど、程々にね」

ユージンは胸ポケットから高級そうな絹のハンカチを取り出すと、部屋の中にあつたボロボロのソファアの埃を丁寧に落とすとしていく。

アイラも慌ててひっくり返っていたテーブルを持ち上げ、埃を払うとソファの前に置いた。テーブルの脚が折れて傾く部分は、その辺にあつた分厚い本を重ねて差し込み補強する。簡易的な応接セットの完成だが、どう見ても貴族を招くには向いていない。怒りを買ってしまうんじゃないかと、アイラは不安になる。

「本当にここへ契約結婚候補が来るんですか？ 待ち合わせまで、あと五分しかありませんけど」  
「待ち合わせに遅れるようなヤツじゃないんだけどな」

ユー진은懐中時計を取り出すと、首を傾げた。

「……候補はおひとりだけなんですか？」

「うん。ひとりしか見つからなかった」

アイラは呆然とした顔で、手に持っていた本を落とした。

「嘘……わたしってそんなに魅力的じゃないんです!? てつきり、錬金術の特許を寄越せて条件つけてくるような強突く張りなら、十人は釣れると思つたんですけど」

「あ……いや……そんなことはないんだけどね……」

歯切れ悪いユージンに、アイラは掴みかかる。

「でもひとりしか見つからなかったんですよ!? 下手な慰めはやめてください。こうなったら……どんなドクズな人間が現れても、絶対に契約結婚に漕ぎ着けてやるわ!」

アイラはメラメラと闘志を燃やす。

「これがジュデイのよく言っている、男を狩るといふ感覚ね。見ていなさい。わたしほど都合の良

「いや、それは狩りとは言わないんじゃないか……って、アイラ主任！　なんか部屋が揺れている気がするんだが」

ユージンの言うとおり、小刻みに部屋が揺れている。そしてその揺れはどんどん大きくなっていった。

「ひっ、本棚が動いている!?!」

壁際にあつた本棚が、縦に揺れながらゆっくりと開いていく。揺れの中心はこのようだ。アイラの頭の中には、無駄な前世の映画知識が駆け巡る。

「もしかして、マッドな元宮廷錬金術師の仕掛けが発動したんじゃないか……建物が崩壊するとか、封印されていたキメラが解放されて世界が地獄絵図になるとか!」

「不吉なことを言わないでくれ！　あり得そうな話だから」

「あり得るんですか」

王宮には過去の宮廷錬金術師たちが起こした破天荒な事件の噂が流れているが、アイラはすべて尾ひれが付いたものだと思っていた。ユージンの反応を見るに、あながち嘘ではないようだ。

（やっぱり、わたしみたいに真面目で模範的な宮廷錬金術師は少ないのね）

とりあえず、身を守るためにアイラはポケットからポーションをいくつか取り出して身構えた。

部屋の揺れは小さくなり、開いた本棚の間には真つ暗な闇が広がっている。キメラが現れるかもしれないと警戒していると、蹄ひづめではなく、カツカツと人間の靴音が響いた。

「ゴホッゴホッ……しばらく使っていないと聞いていたから不安でしたが、まだこの隠し通路は生きていますね」

咳き込みつつも暗闇から姿を現したのは、長身の美しい青年だった。透き通るような金色の髪に付着した埃を手で払い、寶石のような碧色の瞳を細めた。

一目で上流階級だと分かるカッチリとした服を着こなす姿を、アイラは何度も見たことがある。時には王宮の回廊で遠くから、時には城下の店で売られている肖像画として。

アイラから見れば天上に住まう御方に、開いた口が塞がらない。

「……ノア第二王子殿下!？」

「こんにちは」

ノアは親しい者に挨拶するかのようになり、穏やかに答えた。低位貴族であり、政治にほとんど関わらないアイラは、ノアと会話したことなんてない。当然、アイラは困惑が止まらない。

しかし、上司のユージンは親しげにノアの肩を叩いた。

「ノア、隠し通路を使うなら使うって事前に言ってくれよ。カメラが現れたかと思つて、怖かつたんだぞ！」

「すみません、ユージン。遅れそうだったので、近道をとりました」

ふたりの随分と親しげな様子を見て、アイラはようやく思い出した。

(そういうえば、ユージン師長は公爵だったわね)

普段、鍊金省のメンバーに振り回されている姿ばかり見ていたから、すっかり頭から抜けていた



が、ユージンは王族と親しくしていてもおかしくない身分だった。

なんとも器の大きい上司に敬意を覚えながら、アイラは失礼のないように気を張りながらノアに礼を取る。

「申し遅れました、殿下。ジェーンズ子爵家長女、アイラです。錬金省の主任を拝命しております」

「存じています。私はノア・ファビウス・リンステッド。よろしくお願ひしますね、アイラ」

「はい、よろしくお願ひします」

ノアがそつと手を出してきたので、アイラが手を重ねる。夜会で淑女へするような手の甲へのキスがされるかと一瞬不安になったが、そんな心配はなく、仕事でするような軽い握手だけですぐに手は放された。

「ところで……ノア殿下おひとりですか？」

「はい。そうですよ、アイラ」

アイラはこてんと首を傾げた。

「わたしの契約結婚候補ってノア殿下のお知り合いなんですよね？ 本人と話し合わなくて大丈夫なんでしょうか？」

「私が契約結婚候補ですよ」

「……………え？」

アイラはたつぷり一分間静止した後、側にいたユージンの首根っこを掴んでソファアの後ろに

しゃがみ込んだ。

そして、小声で——しかし、強い口調でユージンに問いかける。

「ユージン師長、どうなっているですか！ 王子様が契約結婚候補って、どう考えてもおかしいでしょ！」

「それが本当なんだよね。あはは……」

どこか諦めた顔をしているユージンを、アイラはキッと睨み付ける。

「いやいや、王子様なら契約結婚なんてする必要ないです。この世に生まれ落ちたその瞬間から、お嫁さん候補でいっぱい。よりどりみどりのハーレム状態でしょ!？」

こそこそと話すアイラとユージンを、ノアは穏やかな表情で見下ろした。

「随分と……おふたりは仲良しですね？」

ノアの声を聞いた瞬間、ユージンがアイラの手を振り切って立ち上がった。

「違うさ、ノア！ 僕たちは上司と部下。それ以上になることなんて、一生……いつつつつしよう、あり得ないから！」

「そんな力強く否定することないじゃないですか。わたし、部下である前に一応女の子ですよ」

ユージンはあわあわと焦りながらアイラから一步下がった。

「ああ、ごめんよ！ でもこれは仕方ないんだ……僕には可愛らしくて穏やかで優しい女性と結婚して、幸せな家庭を築くという夢があるんだ。だから、まだ死ねない！」

「いや、意味が分からないです」

上司のお嫁さん妄想なんて興味がないと、アイラは無表情でユージンを見た。

そんなアイラとユージンの姿を見ていたノアはくすりと笑うと、ポロポロのソファアに腰を下ろす。

「まあ、少し長い話になるし、座ろうか」

「……はい」

アイラはノアの向かいに座り、ユージンはノアの隣に縮こまるように座った。何かに怯えているような様子を疑問に思いつつも、アイラは口を開いたノアに意識を向ける。

「まず、アイラの契約結婚候補に名乗りを上げたのは、私の意思です。私もアイラと同じ……意に染まない結婚を強いられそうな状況なのです」

「それは……王宮内のぐちゃぐちゃでドロドロの権力闘争が絡んでいたりするのですか？」

「そんなことはないですよ。ちょっと兄を蹴落として、私を王にしたい勢力が盛んに動いているだけ」

ちよつとどころじゃないんですけど、と言いかけたのをアイラは必死に抑え、どうにか苦笑いで誤魔化した。

「自分の娘と結婚させて、権力を牛耳ろうという魂胆が見え見えなんですよね。私は王位など、一度も望んだことがないのに」

困ったように溜息を吐くノアからは、言葉の通り王位への野心は感じられない。

「ノアは昔から、何でもできる……天才気質なんだ。だから、次の王にと推す声は根深い」

確かにノアが優秀だというのは、周知の事実だ。幼少の頃から武術を習い、その実力は騎士団上位にも引けを取らないと聞く。今は宰相の下で補佐官として学んでいるようだが、仲の悪い国務省と外務省、どちらからも信頼が厚く、さらに経験を積んだ後は国家の重要な役職に就かれるのは間違いない。

（もちろん、女性からの人気もすごいよね。確か、令嬢たちが抱かれない男第一位、結婚したい男第二位、爽やかすぎる貴公子ランキング第一位……碌でもない情報ばかりね）

カーティスとノアは、若い令嬢が狙う結婚相手の二大巨塔だとジュデイが言っていた。そんなふたりに結婚詐欺と契約結婚を持ちかけられている自分は一体何なのだろうと、アイラは遠い目をした。

「私は兄上の方が王に向いていると思いますよ。国を一番に考える人格者ですから。それに先日、ラウシェンバッハ王国のエルザ王女と兄上が結婚し、王家的には次の王は兄上以外にあり得ないのですが」

「なるほど。権力者たちを諦めさせるために、わたしと契約結婚を結びたいということなんですね」

だが、申し訳ないがアイラはノアとの契約結婚には及び腰だった。

彼と結婚すれば、国中のあらゆる女性から恨みを買って嫌がらせを受ける可能性が高い。そして、王族と結婚すれば、色々な付き合いや行事に参加しなくてはならないだろうし、そうなれば研究時間が減る。単純にメリットが少ない気がした。

「はい。ジェーンズ子爵家の方々ならば、権力闘争に興味はないでしょう。高位貴族ではなく、子爵令嬢のアイラと結婚すれば、私が王位に興味がないという意味表示にもなります。そして、貴族派を牽制できる」

「貴族派、ですか？」

「ウエストン公爵は貴族派の重鎮です。簡単に言う……反王家思想を持っていると言えはいいでしょうか。王家に従うのではなく、政治を自分たちで動かしたいんですよ」

「貴族派の重鎮である、ウエストン公爵に錬金術師のわたしが嫁ぐと何かまずいことでもあるんですか？」

アイラが問いかけると、ノアは笑みを浮かべた。

「アイラの錬金術師としての専門はなんですか？」

「金属や鉱物の錬成とポーションの開発ですけど」

「人々の生活を豊かにする、素晴らしい技術です。ですが同時に……戦いにも活用できると思いませんか？」

「それは……ウエストン公爵がわたしの力を使って、王家転覆を狙っている、と」

アイラは胸の奥がギョッと締め付けられる。

「アイラの錬金術師としての実力、そして彼の人脈と資金力をもってすれば可能な話です。自分が思っている以上に、アイラは優秀な錬金術師なんですよ」

「日々、研究に勤しんでいるだけで、そんなこと気にしたことなかったです。わたし程度の錬金術

師は、サイド神国にはうじゃうじゃいると思いますし……」

サイド神国とは錬金術発祥の地で、とても高い錬金技術力を持っていると噂だ。秘密主義で鎖国しており、この国との交易や人の行き来はほとんどない。

だが、錬金術師を育成する学校で、どれだけ努力してもアイラはサイド神国の留学生から一度も主席の座を奪うことができなかった。それほどまでに、両国の錬金技術の差はあるはずだ。

「サイド神国の錬金術師がどの程度か知りませんが、私はアイラが一番の錬金術師だと思っておりますよ」

「……ありがとうございます」

アイラは曖昧に笑った。

「王家としては、アイラを貴族派のもとへ行かせることはできない。第二王子としては、無用な権力闘争を避けるため、低位の貴族令嬢と結婚したい、それが今回契約結婚の話に乗った理由です」

ノアが真剣な顔でそう言ったかと思えば、今度は年相応の青年らしい明るい笑みを浮かべる。

「ですが一番の理由は、大切な人たちが幸せになるために、契約結婚がしたいんですよ」

「王太子殿下を慕っているんですね」

「ええ、尊敬すべき人です」

本当に大切そうにノアは胸に手を当てて言った。

「ですが、私との契約結婚にアイラが乗り気ではないと分かっています。ですので、私と契約結婚をした場合のメリットをご説明しましょう」

「……メリット、ですか」

「まず、王家の仕事はしなくていいです。夜会への出席や御茶会の参加も不要です。下手に第二王子妃が優秀だと、担ぎ上げる馬鹿が出てきますから。もちろん、私たちの間に子どもを作る必要もありません」

良い嫁にはなれる自信は一つもないけれど、ダメ嫁には努力せずともなれる自信がある。アイラはその事実にも、頬を引きつらせた。

「次に、私と婚姻を結ぶことで色々な部署が錬金省に注目します。予算案も通りやすくなるでしょう。より、研究予算を割くことができるようになると思います」

「予算増大!？」

「今回の契約結婚に際し、私はアイラから一切の金銭・利権を受け取りません。そんなもの、私には必要ありませんから」

「ですが……」

女性の恨みというのには根深いし、王家の仕事をすべて免除だなんて虫のいい話はないと思う。最低限の国事などには出席を求められるだろう。

「そういうえばアイラ。先日の会議で仕官している者の王宮での泊まり込みが禁止になったのを知っていますか?」

「いいえ。知りませんが……」

ユージンの方へ視線を向けると、彼はしまったという顔をした。おそらく、部下たちに伝えるの

を忘れていたのだろう。

「過重労働の防止というのが表向きの提案ですが、その実は王族警護の安全面を強化するための措置です。もちろん、王宮内に部屋が用意されている上級文官や武官は別ですが」

「でも、それでは仕事に差し支えるときがあるのでは……」

「繁忙期などは致し方ありません。申請書を出せば、泊まり込みも可能。ですが……毎日申請書を出していれば、文官たちが見逃さないでしょうね」

「絶対に財務部が錬金省の予算を減らしにかかるわ!!」

ケチケチ文官たちが狐のような顔で計算器を構える姿が、アイラの脳裏によぎった。

「その通り。ですがそれも、私が婚姻の際に与えられる離宮に住めば問題ありません。通勤時間は徒歩五分以内でしょうね」

「徒歩五分圏内!？」

「私と契約結婚すれば、今までよりも良い宮廷錬金術師の生活が送れますよ」

思わず飛び跳ねてしまいそうな言葉に、アイラの心が揺れ動く。

「大丈夫です。兄と義姉、それに父への対応はすべて私がやりますから。どうぞアイラは、充実した研究の日々を過ごしてください」

アイラの脳内でめまぐるしく情報が精査され、心の天秤が一気に傾いた。

「わたしたち良い契約結婚ができると思います!」

カーティスの結婚詐欺を回避できて、今よりも充実した研究ライフを送れるのであれば、女性た

ちの恨みも最低限の国事も親戚付き合いも我慢できる。むしろ、想定外の好条件だ。

「私もそう思いますよ、アイラ」

ノアとアイラは頷き合い、ユージンを交えて契約書を作成する。

おおよそ、二時間かけてできた契約書は、アイラが思っていたよりもシンプルなものになっていた。

「ノア、アイラ主任。契約結婚の内容……本当にこれでいいのかい？」

心配そうなユージンを尻目に、アイラは契約書を読み上げる。

「その一、互いの権利は対等である」

すると、ユージンがアイラに微笑んだ。

「その二、互いの立場・事情を最大限に尊重すること、ですね」

「その三、もしも好きな人ができたら、全力で応援すべし！ まあ、わたしには起こらないと思

ますが、ノア殿下はおモテになるでしょうから。お相手が現れたら、全力で惚れ薬を……って、

必要ないですね」

「そんなことはないですよ。もしもの時は、よろしくお願いします」

シンプルでいてビジネスライクな契約書に、アイラはご満悦に頬を綻ばせた。

「結婚式をもって、契約締結となります。よろしくお願いします、ノア殿下」

アイラが頭を下げると、ノアが少し困った顔をした。

「アイラ、もっと普段通りの口調で話していただけませんか？」

「ですが、ノア殿下も丁寧な口調ですし……」

「私の癖のようなものです。私たちは契約とはいえ、対等な夫婦となるのですから。遠慮はいりませんよ」

「……そう、ですね……いいえ、そうね。ノア」

確かに、これから契約結婚を結ぶのだから、ずっとかしこまっている訳にもいかない。

「あと、式は三ヶ月後にしましょう」

「え!? 早い……確か、王太子殿下の時は婚約から結婚まで二年はかかっていたわ。それに親に結婚の許可を取らないといけないし……」

あまりの早さにアイラは目を瞬かせた。

「私は第二王子ですから、周辺国の代表を招いた大々的な結婚式は挙げなくて大丈夫です。国王の許可は既に取っていますし、ジェーンズ子爵の許可さえいただければ、すぐにでも婚約を発表します」

「ノアが相手だと言えば、両親は特に反対はしないと思うわ。というか、娘の結婚相手とか、あまり興味がなさそうだし」

悪い人ではないし、家族への愛情はあるけれど、かなりの変わり者。それがアイラの両親への印象だった。

「良かったです。ウェストン公爵が急な外交で一ヶ月ほどこの国を離れている今がチャンスです。早々に私たちの仲を周知させるため、この結婚は恋愛結婚だと噂を流しましょう」

「恋愛結婚!？」

「契約結婚だと悟られないための策です。それに、恋愛結婚ならば、多少の身分差でも怪しまれませんが。結婚を反対されても『私たちは愛し合っている』と言えば、若者特有の暴走だと誤魔化しが利きます」

「ほほう。奸計を巡らせる訳ですな」

アイラはしたり顔で顎に手を当てる。ユージンはそれを見て、深く溜息を吐いた。

「……あの、僕はもう研究に戻って良いかい？」

「何を言っているんですか、ユージン。今から私と結婚の根回しに行きますよ」

ノアは立ち上がるとユージンの腕を強引に取った。

「おい、ノア！ 引っ張るな……僕は研究がしたいだけなんだあああああ」

ユージンは出荷される子牛のように、抵抗することもできずノアに引き摺られていく。

「アイラ。明日の朝に迎えを寄越すので、一緒にジェーンズ子爵へ結婚の許可を取りに行きましょう」  
う

「分かったわ！」

ノアとユージンは隠し通路に消えていき、本棚が再び部屋を揺らしながら入り口を閉じる。

「さて、明日まで実験の続きをしようかな」

この時、アイラは気づかなかった。

まるで事前に準備をしていたかのような、ノアの手際の良さに。そもそも、第二王子の結婚式が、たった三ヶ月で準備ができるはずがないということに。

そして何より、ノアのアイラに対する強烈な恋愛感情に――

### 第三章 転生錬金術師の新婚生活

契約結婚二日目。アイラはぐったりと疲れを滲ませた顔で、ヨロヨロと離宮から錬金省へと向かっていった。

「……騙された」

うまい話には裏があるとはよく言ったもので、ノアがアイラにベタ惚れという予想だにしない事実のせいで、アイラは寝不足――というか、一睡もできなかった。何故なら、初夜でのノアとアイラのドア越しの攻防は、結局のところ日が昇ってからも続いたのだ。

「結婚式を挙げるまで、アイツ……猫被っていやがったのね」

夜にアイラの部屋を訪れるまで、ノアはアイラに気がある素振りなど微塵も見せず、ビジネスライクに接してきた。あれはすべて、この契約結婚を破談にしないためだったのだろう。

令嬢たちが憧れる第二王子様に告白されたというのに、アイラの心の中は鬱々としていた。現実とは無情である。